

ジュリヤン・ソレルの〈手紙〉

高木, 信宏

<https://doi.org/10.15017/2332563>

出版情報 : 文學研究. 90, pp.71-87, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ジュリヤン・ソレルの〈手紙〉

高 木 信 宏

スタンダールの長編小説『赤と黒』のなかでも、とりわけジュリヤン・ソレルによる狙撃の挿話は、未解決と見なされる問題のために今日にいたるまで批評家や研究者たちの筆をたえず駆りたたせてきた。というのも、内的独白や作者の介入によって、あれほど執拗に作中人物の心理分析を披露したスタンダールがくだんの場面展開になかで（テキストの余白においてさえも）、主人公の犯行の動機や心理などについてまったくの沈黙を決めこんでしまったためなのだが、それにくわえて歴史的なモデルの存在が事情をより複雑にしている。たとえば、ジュリヤンの発砲のプロット上の必然性をごく単純に現実のモデルにみとめるばあい、作品としての価値がテキスト外部の事実に限定されてしまうのではないかという懸念がとうぜん考えられよう。この点にかんして、賢明なモーリス・バルデーシュに倣い、ベルテ事件と『赤と黒』の筋立ての血縁関係そのものではなく、両者の精神的な色彩をへだてる作家の想像力へと視線をむけることで、小説の起源探究の正当性をも保証しようとする立場から解釈にとりくむこともけっして不可能ではあるまい¹⁾。しかしながら、多くの人々にとっては、狙撃はあくまでも主人公の真の情熱の顕現にほかならぬ内的運動の必然でなければならず、物語の骨子の自立的な根拠をテキスト内部の読みによって見いだそうという解釈の試みはその主流となった、といえるだろう²⁾。

このような心理主義的な立場にたいして、ジェラルール・ジュネットによって物語論的な視点から注目すべき見解がもたらされる³⁾。なぜならば、そこで彼がしめす考えは、バルザックやメリメなど作家の同時代人や後代の批評家エミ

ール・ファゲなどによる『赤と黒』批判という文学史的な現象をたくみに説明するのみならず⁴⁾、アンリ・マルティノやピエール＝ジョルジュ・カステックス等の先行研究の視点を無効にしかねないたぐいのものであったからである。くだんの挿話において問われるべきは、われわれの視界から消去されたものではなく、なにゆえにそれが消去されたのかという理由なのだ、とも換言できるジュネットの姿勢は心理的不透明さじたいのもつリアリティーに審美的な価値をみとめるものであるだけに、ジュリヤンの犯行の奇異さを心理学的な可知性に還元しようとする立場とはまったく相いれない性質であることだけはたしかであろう。だがいずれの立場にせよ、議論の中心は挿話における心理的な注釈の不在にあったわけである。以下の考察で、われわれは主人公の不可視の心理を積極的に問題にすることをみずからに禁じることになるのだが、それはこれまでの研究に批判的なためというよりは、むしろ狙撃の挿話を構成する『赤と黒』に固有な要素、それが書かれているがゆえに現実のモデルにはない豊かさを作品の形象化に保証する顕在的な要素に、まなごしをむけたいからにはかならない。

ラ・モール伯爵宛のレーナル夫人の手紙を読んだジュリヤン・ソレルが、パリを発ちヴェリエールの教会で夫人を狙撃するまでの挿話は、ガルニエ新版でわずか1ページにもみたくないものである。そのためか、作家による注釈の少なさや心理的な記述の意図的な削除ばかりが文体的な特徴としてもっぱら強調されて語られてしまうのだが、しかし、その個々の細部に眼差しをむけるならば『赤と黒』的としかしいような要素がしかるべく配置され、この挿話を活気づけているのを無視することはできまい。じっさい、野心と恋の駆けひきに彩られた現実の首都から、愛と死の最終章が展開される「架空の町」への主人公のトポロジックな移動を描く作家の簡潔な筆が、いくつかのモチーフを導入することでこの短い挿話を作品『赤と黒』にふさわしく構造化している事実を裏づけるにふさわしい貴重な指摘が、いままでに一度ならずなされているの

だ。たとえば、ハンス・ボル・ヨハンセンは継起的におこる2つの「旅」をモチーフとして分析し、ジュリヤンの動転をしめすシニフィアンとしてのその機能を正しくいあてていよう⁵⁾。また、ジュヌヴィエーヴ・ムイヨーは挿話中の「教会」を第1部・第5章と第28章の「教会」と照らしあわせ、共通の要素を探りだすことで、それらがいわば「原音素」ともいうべき特権的な空間としてテキスト内で機能している事実を鮮やかな手つきで浮き彫りにしてみせている⁶⁾。これらの先行研究が、われわれにとってきわめて刺激的だといえるのも、そこで問題にされるのが物語的構成の凝集や連鎖ではなく、小説空間における主題論的な反復と変奏という一種の相同関係であるからにはほかならない。それは、いわゆるリアリズムとはまったく異なる視点から、作品の細部同士の重ねあわせや全体的な俯瞰という手続きを介して、それらの照応関係や機能的身振りの同一性を抽きだす読みであり、そのようなモチーフ群の隣接や交錯によって構成されるひとつの挿話が、物語の連続性という視点に収まりきらないかたちでテキストに織りこまれていさまを読む者の視界に鮮明に浮かびあがらせるものなのだ。したがって、『赤と黒』がとりわけ狙撃の挿話をプロットの点でいかに現実のベルテ事件に負っていようとも、もはや両者は形象化した複数の細部同士のとりかわす目配せゆえにまったく似てはいないとさえいえるのである。

また、このような方法において、物語の「真実らしさ」という問題さえもが焦点化されえないという意味では、われわれはジュネットともあきらかに異なる観点に立っているわけなのだが、では、くだんの挿話中に「旅」や「教会」以外の『赤と黒』的な特権的モチーフとして、ほかにどのようなものが見いだされるのかという問いに答えるために、まずジュリヤンがヴェリエールへとむかうくんだりから見ていきたい。

ジュリヤンはヴェリエールへ向けて出発したのである。急ぎ旅の途中で、マチルドに手紙を書こうと思ったが、どうしても書けなかった。手が紙の上に、字の形になら

ぬ線を描き連ねるばかりだった。⁷⁾

手紙の書けぬ原因をめぐっては、主人公が陥った「夢遊状態」のためとも、馬車の振動のためとも、多くの議論がなされてきたわけだが、もちろん、そのような心理的・物理的な次元に議論をもどす目的で、この部分を引用したのではない。ほかならぬ、文字にならない線を書き連ねるという運動そのもののイメージこそが、このうえなくジュリヤン・ソレル的な身振りとして読者に感受されうるような小説的構造体の一端を、「手紙」という主題の分析をつうじて顕現させたいからである。ここであらためて強調するまでもなく、「どうやら書簡体の小説になりそうだな」⁸⁾と主人公をしていわしめる小説『赤と黒』が、筋立ての点でも「手紙」をたびたび積極的に活用し、第2部における主人公の恋の戦術や野心の挫折といった展開においてとりわけ重要な役割を担わせていることは周知のとおりである。だがむしろ、「手紙」が主題になるとき、なによりもまず思いおこさねばならないのは、さきに引いたジュリヤン・ソレルのシニカルな吹きがいかにも仄めかしているように、いかなる場面においても彼の手になる書簡が、真の情熱の特権的な媒介手段として機能することがないという事実である。スタンダールが情熱恋愛の理想として引きあいだす『エロイズとアベラールの手紙』や『ぼるとがる文』⁹⁾に見られるように、告白の文句を手紙のなかで露にすることをジュリヤンはけっしてしないのだ。しかも注目すべきことに、そうした態度はスタンダールの恋愛においておよそ例外的な部類に属するものなのである¹⁰⁾。したがって、主人公の「手紙」の固有性を捉えるうえで重要なのは、彼が「手紙」と取りむすぶ関係のよそよそしさだといってもさしつかえあるまい。換言するならば、ジュリヤンにとって「手紙」とは、自己の赤裸々な内面の伝達手段としてふさわしからぬきわめて社会的・戦略的な領域に属するものなのである。たとえば、マチルド・ラ・モールからの最初の恋文にたいする彼の慎重をきわめた返信を思いおこしてみよう。

「これはまたどうしたことでございます、お嬢さま、ラ・モール家のお嬢さまもあろうおかたが、お父上の従僕アルセーヌを通じて、ジュラのしがいない材木屋の小せがれなどに、あまりにもおやさしいお手紙をお渡しになるとは。きっと正直者のわたくしをおからかいになるおつもりでございましょう……」そこで、さきほど受けとった手紙のなかから、いちばんはっきりした文句を書き写した。¹¹⁾

マチルドのこゝばを引用するこの文面がこのうえなく残酷なもの、それがたんに相手の気持ちをはぐらかすものだからではなく、「社会の最下層に属している男」に手紙をだす行為そのものが「社交界に大きな衝撃をあたえ、自分の階級を傷つけるうえに、軽蔑に満ちた、拭い去ることのできない汚点」¹²⁾であることを、彼女の自尊心にあらためて思い知らせるものだからにほかならない。もちろん、この返信がこのように社会的・階級的な色調を帯びるのは、主人公の社会的な上昇を物語的な主題として作品が導入している以上、いわば構造的な必然なわけなのだが、おそらくその事実にもっとも自覚的であるのは、「書いてはならないことがある」¹³⁾というナポレオンのこゝばを肝に銘じて理解するジュリヤン自身をおいてほかにあるまい。とはいえ、たんに敵の陰謀にそなえる野心家の戦略という防御的な側面からのみ、手紙を書くという行為への主人公の配慮が問題になるのではないのだ。彼の手紙にたいする慎重さを理解するためには、たとえば、ジュリヤンからナポレオンの教訓を以前聞いていたにもかかわらず、結局マチルドの方は告白の手紙をしたためてしまったという相違を思いおこす必要があるだろう。おそらく、2者の違いはそれぞれの育った知的環境の差だともいえるのだ。というのも、パリの大貴族としてしかるべき教育をごく当然のこととして享受した彼女は、文字を書くという行為にたいしてジュリヤンほど敏感でも慎重でもないはずだからである。つまり、彼女にとってはごく違和感のないかたちで身についた事柄も、ジュリヤンのような第3階級の男の目には、社会階層的な違いを色濃く映しだしもする特権的な事象にほかならないのである。

この事情をよりよく理解するためには、革命以後に初等＝中等教育による言語統一政策が推し進められたとはいえ、当時のフランスの人口のうち正しくフランス語を書くことのできる人間の割合がどれくらいであったかを思いおこす必要がある¹⁴⁾。しかも、無償の義務教育によって地方の一小村にまで初等教育がもたらされるのは1881年までまたねばならない。いうまでもなく、その当時ジュリヤンのような出自の青年がラテン語の読み書きができるということは、きわめて例外的な出来事なのである¹⁵⁾。ソレル親翁が息子の読書癖を「本ぐるい」と憎み嫌うのも、「自分自身字が読めなかった」¹⁶⁾からにはほかならなかったし、むしろその世代の下層階級の人間にとってはそれが普通だったと考えてよい。しかし、文字にかんする歴史的・社会的な細部をとり入れることによって、『赤と黒』がこのうえなく刺激的な作品となるのは、綴字というものの孕む階級性が問題となる瞬間であろう。ジュリヤンが書記としてラ・モール家に雇い入れられる挿話において、侯爵がまず試すのは正確な綴字法を習得しているかどうかである。

それから一時間たつと、侯爵がはいつてきて写しに目をとおしたが、ジュリヤンが *cela* [それ] という語を *cella* と 1 2 つで書いているのに気がついて、びっくりしてしまった。[…]

「*cela* という字はひとつでいいんだよ。写しがすんだら、綴りに自信のない字は辞引にあたっておきたまえ」[強調は筆者]¹⁷⁾

いうまでもなく、専門用語を含めた語彙の量が侯爵の関心の対象となっているのでないことは、ここでスタンダールが選択している《*cela*》という語からもあきらかであろう。まさに、フランス語を誤りなく綴れるのか否かという、書くという行為そのものが問われているのである。そして、ジュリヤンが犯した綴りの誤りは、たんに教養の不足を読みとるだけですむ問題ではなく、彼の育った社会的境遇と知的環境を一挙に露呈させるものとして捉えねばならないの

だ。というのも、当時のフランス語の読み書きができた人間のうち、正しく綴れる者の数ははるかに少なかったのであり、もちろんそれは特権階級と一部の中産階級に属する人間たちに限られていたからである。じじつ、フランス語統一政策の一環として、正確な綴字をさだめた正書法が国定となるのは、『赤と黒』の出版のおよそ1年半後の1832年なのだ¹⁸⁾。したがって、ラ・モール侯爵の要求する正確な綴字法とは、王政復古期にあつてことばづかいや物腰や装いなどとともに教養階級とそうでないもの選別すべく残酷に機能する階級的な符牒にほかならないのである¹⁹⁾。おそらく、ラ・モール家に迎え入れられるまでに文字を綴ることにはすでにもうしぶんなく慣れ親しんでいたとはいえ、ここであらためてジュリヤンの自尊心と野心が、文字というものによって思い知らされる綴字法の習得の義務を、どれほどの衝撃をもって意識したかは想像にたたくない。たとえば、さきにふれたマチルドの恋文の挿話は、同時に、綴りの間違いをおかしたとき以来、いかに彼が洗練し様式化した書きことばというものについて細心の注意がゆきとどくようになったのかをもさりげなく示唆している。

彼は筆跡を調べはじめた。ラ・モール嬢の字体はなかなかきれいなイギリス風の字体だった。彼はうれしさをまぎらわすために、なにか別のことに気を使わないではいられなかったのだ。〔強調は筆者〕²⁰⁾

もはや、ジュリヤンにくらべて、マチルドが書くという行為にたいしてそれほど敏感でない理由はあきらかだろう。むしろ、毎日顔を合わせていながら告白を口にせず、それを手紙に託さざるをえないマチルドの姿が、「いくらでも簡単に話しあえるのに、まったく手紙の好きな娘だな」²¹⁾とつぶやくジュリヤンとは対照的に、読む者に恋する娘の純情さや羞恥心を思い描かせてしまう点では、彼女の方がはるかに告白の伝達手段としての書きことばの透明さを素材に信頼しているようにみえる。むろん、その信頼には、社会のあらゆる基準

が自分たちにあると確信する者のみに特有な安心感がいくぶん入り混じっているのは指摘するまでもなからう。反対に、そこまで幸せでも鈍感でもないジュリヤンは、自身を上流社会の人間として捏造すべく、特権階級の洗練され様式化された書きことばにたいする、ひいては「手紙」にたいする自身の積極的な関与を確立したにちがいない。そして、彼において戦略的な重要性が強く意識されれば、それだけいっそう書きことばや手紙の様式や習慣は、その高度に技巧と熟練を要求するコードの体系を露呈することになり、自然らしさからはかけ離れたものとして意識されざるをえないのだ。その意味では、「手紙」による告白という点でジュリアンが『アルマンス』や『リュシヤン・ルーヴェン』の主人公たち、つまり貴族や銀行家の息子たちとはきわめて異なる素振りを見せるのも、ごくとうぜんのことといわねばなるまい。

ところで、ジュリヤンの世渡りの強力な武器がその驚異的な記憶力である点については、もはやいちいち例をあげて説明するまでもないだろう。また、彼がその能力をことさら誇りにおもうほど愚かではないことも、彼はその能力にたいする人々の賛嘆の念を利用しているにすぎず、むろん論ずべき問題ではない。そのようなジュリヤンの振るまいがことのほか重要なのは、暗誦という一種のひけらかしのもつもうひとつの側面、すなわち、カムフラージュによる自己の隠匿という機能の点においてなのだ。というのも、ジュリヤン・ソレルの社会的な基本戦略として一貫して認められる真の自己をつつみ隠すという姿勢は、かたちをかえて彼の「手紙」にもあらわれているからである。暗誦のもつ即興性やパフォーマンス的な要素こそないものの、ジュリヤンは「手紙」のベクトルをなにかを隠すことに、あるいは書簡の受信者の眼差しを真実から逸らせることにむけている。われわれが、彼の「手紙」の社会性・戦略性を問題にする根拠は、すでに指摘したナポレオンの告白の禁忌や、綴字法の喚起する階級性だけでなく、対人関係において人の目をあざむく手段といった戦略的・積極的な側面にも見いだすことができるのである。

そのような実践として誰しものが認めることのできるジュリヤンの特権的な身

振り、それは「引用」あるいは「引き写し」という行為にほかなるまい。われわれはすでに、彼がタルチュフの慎重さからマチルドの恋文の文句をその返信に引用するのを見た。もちろん、彼がそうするのも、手紙を読むものが彼女ただひとりに限られるとは絶対に保証できないからだ。

おれの返事はだれかに見られるかもしれない。それにはこういう手があるぞ、と残忍な口調になるのを抑えながら、ゆっくりとつけ加えた。書出しに、あのすばらしいマチルドの手紙のなかでいちばんはげしい文句を、そのまま使ってやろう。²²

ここで注目しなければならないのは、マチルドの「いちばんはげしい文句」そのものは少しもつまびらかにされておらず、またジュリヤンの返信じたいすでに例としてあげた文面以外を読者は知ることができないという点であろう。この事実によってもっぱら強調されるのは、彼の返信のおそろしく戦術的な性格であり、またそれを要求する社会的な環境なのである。すなわち、小説『赤と黒』が形象化する社交界では第3者の介入の可能性によって、書簡の送り手と受取り人のあいだの一見閉ざされた関係が、たえず緊張を強いられるのだ。とうぜん、そのような社会的な磁場に敏感であれば、甘美な恋愛がその弛緩しきった告白を密やかにさらけ出すことなどとうていできはしまい。反対に、文通の社会性をきわだてる要素としてそこに認められるのは、手紙の受信者の2重化という現象である。さきほどのジュリヤンの返信における引用は、マチルドその人ではなく潜在的な手紙の読み手にむけられていたのをあらためて指摘するまでもなからう。さらにこのほかにも、類似した手紙の例は小説の第1部のなかにも見いだせる。それは、ふたりの関係にむけられたレーナル氏の疑惑のまなごしを欺くためにジュリヤンとレーナル夫人が結託して偽造する手紙である。収容所長ヴァルノが匿名でレーナル夫人に宛てたように装われるこの手紙は、ほかならぬレーナル氏に読ませる目的で作成されたのであり、それも夫人が考えた文面どおりにジュリヤンが本の文字を切り抜いてヴァルノの薄青い紙

に貼りつけてできあがるのである。だが、これらのばあいのジュリヤンの2重化のしぐさは、攻撃的というよりはむしろ防衛的なものにとどまっていた。その意味で、真にジュリヤン・ソレルにふさわしい振舞いが見いだせるのは、マチルドの恋心をふたたび呼び覚ますためにフェルヴァック夫人に偽りの恋文を書き送る挿話にはかならない。まず、われわれにとって興味深いのは、ジュリヤンがけっして自分で手紙の文面を考えたりはしない点である。彼はコラゾフ公爵の忠告どおりに、カリスキーという男が美人のクウェーカー教徒の女に宛てた53通の手紙を、イギリスの地名のままになっているのにも気がつかぬほど、ただひたすら書き写して夫人のもとに届けるばかりである。むろん、フェルバック夫人との恋の文通は内密であってはならず、その存在は是が非でもマチルドに知らなければならぬのだ。たとえ間接的な方法であっても、彼の恋文の真実の名宛人がマチルドであるのはいまでもなからう。以上の例において、ジュリヤン・ソレル的な「手紙」をきわだたせる「引き写し」と「手紙の受信者の2重化」という特権的な身振りが、戦略的な色彩を背景にして充実した機能ぶりをしめしているのがあきらかに認められるはずだ。

さて、ジュリヤンの「手紙」が、スタンダード的な世界においてきわめて例外的にも、愛の告白を排除してしまうような社会的・戦略的な領域に属したものであるという事実を確認しおえた以上、われわれはすでに提出しておいた問題にふたたび戻らねばなるまい。もはや、狙撃の挿話において、ジュリヤンの「手が紙の上に字の形にならない線を描き連ねるばかりだった」という身振りが読む者にこのうえなく喚起するものとは、とつぜん彼をおそった主題論的な失調現象いがいのなにものでもないだろう。もちろん、このジュリヤンの機械的な仕種が、たとえばフェルバック夫人宛の手紙を書き写すあの単調な身振りをどこか思い起こさせるものである点も見落としてはならないのだが、なによりもまずジュリヤンの「手紙」が、社会性・戦略性に緊密に結びついた主題論的な機能によって物語の持続にたえず作用していたからには、書くべき内容を見いだせない主人公の身振りとは、彼の陥ってしまった社会的な宙づり状態

をあざやかに浮き彫りにしているというべきものなのだ。ジュリヤンの野心が実現を目前にしていた「ジュリヤン・ソレル・ド・ラ・ヴェルネー従男爵」としての地位もラ・モール家とのつながりも、公爵宛のレーナル夫人の手紙²³¹によって一瞬にして消えさった一方で、このあまりにも突如な転落の事実は、ヴェリエールの武器商人がジュリヤンに出世のお世辞をのべるという細部からもみとれるようにまだ社会に広く知れわたってはならず、そのような他者による認知がなされていない分、社会的なアイデンティティーは不安定たらざるをえない。あるいは視点をかえて、社会的な転落者とよぶにはあまりにも時期尚早であるのは、物語の持続という点からすれば主人公が過渡的・潜在的な状態にとどまっているためだとも言い換えられよう。ジュリヤンがふたたび（そしてそれが最後になるのだが）手紙を書くことになるのはもちろん狙撃の後しばらくたった牢獄のなかでなのだが、それが可能になったのも、もちろん彼が犯罪者という新たな烙印をおされることによって、いったんは喪失した社会性をいまいちど明確にとり戻したからにはほかならない。たとえば、ジュリヤンが、「面倒な仕事 (un ennuyeux devoir) がのこっているな」と考えながらマチルド宛てに書いた最後の手紙には、犯罪者としての社会的な配慮がつぎのようにしめされている。

もうこれからは、わたしは手紙を書いたり、あなたの名前を口にしたりしません。あなたも、わたしのことはいっさい口にしないでください。たとえわたしの子供が相手でも。黙っていることだけが、わたしの名誉を守る道です。世間のひとにとっては、わたしはありふれた人殺しということになるでしょう。²³¹

マチルドにこれから先の身の処し方について、偽名などをつかいすべて内密に運ぶように指示したあとで、ジュリヤンはシェークスピアの『オセロー』からイアーゴの台詞を引用して手紙を締めくくる。「今からは一言も口を聞くまい」という文句は、2人の文通に終止符を打つために引かれているのだが、そ

の引用が第2部第34章にみいだせるマチルドの手紙の「『オセロー』の芝居のような調子の書出し」²⁵⁾に対応したものである点はすでに指摘されている²⁶⁾。しかしながら、このイアゴの台詞に注目するのも、ここであらためて愛する女を殺害するというオセロー的な主題を強調するためばかりではなく、その台詞そのものはシェークスピアのテキストのなかでイアゴの謀略の動機を間接的に問いただすオセローの台詞への返答として置かれていた点がきわめて意義深く思われるからにほかならない。たしかに、ジュリヤン・ソレルとは、自身のうちにオセローとイアゴの共存と呼びうるような2面性をもった存在であり、そのばあい前者は情熱の領域を代表し、後者は偽善・策謀といった社会的な領域を代表するものだ。それゆえ、ジュリヤンの最後の手紙のなかにイアゴの名が見いだされる事実は、われわれが問題にしてきた主人公の「手紙」の社会性をあらためて裏づけもしようし、ひいては、狙撃の挿話におけるジュリヤンがオセロー的存在いがいのなものでもないことを、いまやイアゴ的モチーフとも呼びうる「手紙」のあのこのうえなく見事な挫折によって語ることも可能なはずである。それにしても、もとのイアゴの台詞が返答としての機能を担っていたのだったら、ジュリヤンがそれを引用するのも、なに者かの問いへの返答だと考えられないだろうか。だとすれば、とうぜん犯行の動機を訊ねるであろうマチルドを先制したものと捉えるのが妥当であろう。しかしながら、今日まで多くの研究者が指摘し、また問題にしてきたように、作者スタンダールが狙撃の挿話においてジュリヤンの犯行の動機や心理状態を意図的に隠蔽したのであるならば、イアゴの台詞はそのような作者の意図にも通ずるものとみなされまいか。もちろん、そのばあい認められるのは、この台詞の発信者と受信者それぞれにおける2重化という現象にほかならず、ジュリヤンとマチルドの関係に作者と読者の関係が重なりあっているのだといえよう。このように思いがけないかたちで、われわれの視界に浮上する「隠匿」、「引用」、「2重化」という主要モチーフがこのうえなく興味深いのは、たんにジュリヤン的な「手紙」の主題論的な常数が確認できたからではもちろんなく、それら

がテキストの内部から外部にむかう運動として、まさに「作品」という閉ざされた意味作用の場を限りなく不可能にしている事実²⁷に遭遇できたためにほかならない。

では、本稿を終えるにあたって、『赤と黒』の2人のヒロインの相違について「手紙」という主題との関連から若干の指摘をしておくことにしよう。まず、マチルドのばあい、性格や心理的な状態はその手紙にきわめて修辭学的に反映されている。そのことは、すでに触れた『『オセロー』の芝居のような書出し』というような箇所にも窺えるのだが、ジュリヤンとの結婚が不可能になった重大な場面におけるつぎの手紙にも顕著に認められるだろう。

なにもかもおしまいです (Tout est perdu)。大急ぎで帰ってきてください。なにもかもすてて、仕方がなければ脱走してでも。お着きになったら、……街の……番地側の、庭の裏口のそばで、辻馬車に乗ったまま、待っていてください。あたしがいってお話します。たぶん庭のなかへ入っていただけるかもしれませんが。なにもかもおしまいになったのです (Tout est perdu)。もうどうにもならないのじゃないかしら。あたしを信じてくださいね。どんな逆境になっても、あたしはあなたのものです。負けたりはしません。あなたを愛していますわ。²⁷⁾

ここで事態の深刻さは、いうまでもなく反復法によって強調されているわけだが、問題の出来事じたいが伏せられているためによりいっそうの効果を發揮していよう。しかも、最後の数句は気高く気丈ですらあり、どこかコルネーユ的な人物の風貌すら思わせものだ。一方、この場面のような、ジュリヤンとマチルドの関係に父親ラ・モール侯爵が介入するという3角形的な構図に類似した状況は、小説の第1部ではジュリヤンとレーナル夫人の姦通をレーナル氏が疑う場面に見いだせよう（むろん、このばあいエディプス的な逆三角形なのだが）。そのなかで、夫の疑惑に怯えるレーナル夫人の動揺は、ジュリヤン宛の彼女の手紙につぎのようなかたちでしめされている。

その翌朝、夜が明けたと思うと、ジュリヤンに好意をもっている料理女が、一冊の本を届けてきた。表紙には、イタリア語でこう書いてあった。「130ページを見よ」ジュリヤンはこの無謀なふるまいにぎくりとしながら、130ページを開いてみると、ピンで手紙がとめてある。涙でにじんだ、綴りもでたらめな走り書だった。ふだんのレーナル夫人の綴りはきわめて正しいので、ジュリヤンはこの些細な事実感動し空おそろしい無謀なやり口をいくらか忘れた。²⁸⁾

もはやいうまでもなく、階級的な符牒として機能する正確な「綴り」は、でたらめになるという失調運動をとまなうことで情熱の真実をつたえる表象として息づいている。それはまさに、マチルドの手紙とはきわめて対照的な身振りに違いなく、ジュリヤンが社会的な上昇につれて正しい綴字法を身につけるとは逆向きの主題論的な運動だといわねばならない。しかも、「涙」という特権的なモチーフによってにじんだ文字は、われわれにラ・モール侯爵宛の夫人の書簡が、やはり「涙で消えかかっていた」²⁹⁾のを思いおこさせましょう。だが、これらの細部がこのうえなく刺激的なもの、文字がおもいがけぬ失調をきたすという点で、まさしくレーナル夫人の手紙が、「手が紙の上に、字の形にならない線を描き連ねるばかりだった」というあのジュリアンの身振りと、その情熱の修辞学を共有しているからにほかならない。「手紙」というモチーフが感動的な相貌をみせるのは、その瞬間なのだ。この余韻のうちに、われわれの関心はあらたに作者スタンダールの伝記的な領域に導かれることになる。『アンリ・ブリュラルの生涯』第46章に見いだせる、「わたしはもうすでに字の綴りを忘れかけている、夢中になった瞬間 (dans les grands transports de passion) にいつもそうなるように」³⁰⁾という記述や、また、「涙」と「綴り」という点でクレマンチヌ・キュリアル夫人の手紙とレーナル夫人の手紙とのあいだの顕著な類似性³¹⁾などから窺えるように、ほかならぬスタンダール自身「情熱の綴り (orthographe de la passion)」にきわめて自覚的だったのである。その意味でも、『赤と黒』ほど、「情熱の綴り」が主題として小説のクライマックスを飾るにふさわしく体系化された作品はほかにない、といえよう。ところ

で、以上の考察から、われわれはジュリヤンとレーナル夫人の関係に比して、マチルドとの関係に副次的な位置づけを性急にあたえるつもりはむしろなく、むしろ、2組の対照のもたらす豊かさにこそ敏感でありたいと思う。

註

- 1) Voir Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris: La Table ronde, 1947, pp.186-187.
- 2) アンリ・マルチノの病理学的な傾向の解釈や、ピエール＝ジョルジュ・カステックスの主人公の犯行に明晰な意志の行為を見いだす解釈、さらにそうした〈理性／狂気〉の対立という議論をこえた次元で、精神分析的な概念なども駆使してジュリヤンの行為の内的な整合性を裏づけようとするショウシャナ・フェルマンやジュヌヴィエーヴ・ムイヨールの解釈などが、その代表的なものとしてあげられよう。ちなみに狙撃の挿話についての研究史的な軌跡はロジャー・パーソンによって詳しく整理されている (voir Roger PEARSON, *Stendhal's violin, A Novelist and his reader*, New York: Oxford University Press, 1988, pp. 135-142)。
- 3) 狙撃の挿話にかんして、ジェラルド・ジュネットはつぎのように指摘している——「最も稚拙なりアリズムの作家でも、難なく安逸など言いたい心理学によって、それらを正当化することができただろう。しかしスタンダールはあらゆる説明を拒否することによって、偉大な行為＝筋——そして偉大な作品——を予測不可能にしているあの野性的な個性をそれらの行為＝筋に保つ、というかおそらく与えることを決然として選んでいるようなのだ」(G rard GENETTE, 〈Vraisemblance et motivation〉, in *Figures II*,  ditions du Seuil, coll. 〈Points〉, 1969, p. 77. [邦訳、『フィギュールII』, 花輪光監訳, 白馬書房, 1989年4月, 88頁)。ミシェル・クルゼはジュリヤン・ソレルの「崇高」をかたちづくる詩学的考察を通じて犯行の動機などを解明しようとする心理主義的な立場を否定している (voir Michel CROUZET, 〈Julien Sorel et le sublime,  tude de la po tique d'un personnage〉, *Revue d'Histoire litt raire de la France*, 86^e ann e, n 1, janvier-f vrier 1986, pp. 104-105)。また、アン・ジェファーツンは、「小説のクライマックスにおけるジュリヤンの行動の〈予測不可能なもの〉は、学術的なものであれ、心理学的なものであれ、たとえどのようなものであろうと、〈礼節にかなった〉読みをまさしく軽んじる要素なのである」と述べている (Ann JEFFERSON, *Reading realism in Stendhal*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. 127)。
- 4) ミシェル・クルゼは、プロスペル・メリメやバルザックら同時代人の『赤と黒』にたいする無理解を「真実らしさ」という観点から説明している (voir CROUZET, *article cit *, pp. 86-91)。
- 5) Voir Hans BOLL JOHANSEN, *Stendhal et le roman, Essai sur la structure du roman stendhalien*, Aran:  ditions du Grand Ch ne, Copenhague: Akademisk Forlag, Collection stendhalienne publi e sous la direction de Victor DEL LITTO, 22, 1979, pp. 159-160.

- 6) Geneviève MOUILLAUD, *Le Rouge et le Noir de Stendhal, le roman possible*, Paris: Librairie Larousse, coll. (thème et textes), 1973, pp. 151-156.
- 7) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir, Chronique du XIX^e siècle*, texte établi avec sommaire biographique, introduction, bibliographie, variantes, notes et dossier documentaire par Pierre-Georges CASTEX, Paris: Bordas, coll. (Classiques Garnier), 1973, p. 432. なお、訳出にあたっては、新潮文庫版『赤と黒』(小林正訳, 1958年)を参照にしたが、文脈によっては筆者が改変をほどこした箇所がある。
- 8) *Ibid.*, p. 315.
- 9) Voir STENDHAL, *Œuvres intimes t. I*, Paris: Gallimard, coll. (Bibliothèque de la Pléiade), 1981, pp. 183-184.
- 10) ジュネットは、「スタンダールにおいては、決定的な伝達の契機(告白, 決別, 戦線布告)は、概して書き言葉に託される」と指摘している(GENETTE, (Stendhal), in *Figures II*, op. cit., p. 163 [邦訳, 前掲書, 182頁])。
- 11) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. 310.
- 12) *Ibid.*, p. 314
- 13) *Idem.*
- 14) 19世紀の初頭においてフランス語の読み書きができたのは7人にひとりの割合であったとされている(voir Marcel COHEN, *Histoire d'une langue: le Français*, Paris: Éditions Sociales, 1967, p. 239)。
- 15) このような歴史的背景にかんして、『スタンダール研究』のあとがきで伝えられるヴィクトル・デル・リットのきわめて示唆的なことばを引いておきたい。ベルテ事件の舞台となったブランク村を散策中に語られる、「こういう村に、あの時代に、ラテン語のできる青年がいたということが、どういうことかわかりますか」というデル・リットのことばはまさに問題の正鵠を射たものだといえるであろう(桑原武夫・鈴木昭一郎編、『スタンダール研究』, 白水社, 1986年4月, 778頁)。
- 16) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. 16.
- 17) *Ibid.*, p. 232.
- 18) ジャック・ショーランは『フランス語史』(川本茂雄・高橋秀雄共訳, 白水社《文庫クセジュ》, 1973年5月, 93頁)のなかでつぎのように述べている——「その前の世紀の上流社会の某々の人があえて犯していた正書法上の気まぐれは、その個人独特の持ち味の一部分をなしていたが、19世紀前半には、それが最大の道徳上の不倫と同じく重大な禁止的となる(正書法は1832年に国定となった)」(cf. Albert DAUZAT, *Les Étapes de la langue française*, Paris: Presses Universitaires de France, coll. (Que sais-je?), 1948, p. 120)
- 19) 当時の教育に認められる階級性について、フィリップ・アリエスはつぎのように指摘している——「民衆教育の思想は、幹部生, エリート, ブルジョワの教育思想にとってかわられたのである。「中央学校」はやがて、アンシャン・レジームのコレージュの再来であるとともに、現在のリセの前身でもあるリセ, つまり帝政期の国立コレージュへと引き継がれていくであろう。民衆の小学校とブルジョワのリセの間には、溝が深く穿たれている。それは階級的教育であった」(フィリップ・アリエス, 『「教育」の誕生』, 中内敏夫・森田伸子編訳, 藤原書店, 1992年5月, 203頁)。

- 20) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p 307.
- 21) *Ibid.*, p. 317.
- 22) *Ibid.*, p. 309.
- 23) この手紙は〈レーナル夫人／告解師〉というように発信者が2重化された例だといえよう。
- 24) *Ibid.*, p. 435.
- 25) *Ibid.*, p. 423.
- 26) 松原雅典はオセロとイアゴの名がレーナル夫人殺人未遂事件の前後に見いだせる点について、スタンダールは「ジュリヤンのレーナル夫人狙撃をオセロのデズデモーナ殺害と重ね合わせて見てほしいのだ」と指摘している（松原雅典、『『赤と黒』の解剖学』、朝日新聞社、1992年4月、144-145頁）。
- 27) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p 430.
- 28) *Ibid.*, p. 114.
- 29) *Ibid.*, p. 431. 同様の例は第1部第26章にも見ることできる。
- 30) STENDHAL, *Œuvres intimes t. II*, Paris: Gallimard, coll. 〈Bibliothèque de la Pléiade〉, 1982, p. 957.
- 31) Voir François MICHEL, 〈Bathilde Curial, une enfant à travers l'œuvre de Stendhal〉, in *Études stendhaliennes*, Paris: Mercure de France, 1958 [1972], p. 84.